

幼い難民に未来を



発行：幼い難民を考える会 〒150 東京都渋谷区広尾4-3-1 TEL 03-499-1226 ●振替口座／東京1-36227

虐殺を描き続けるチョムリス君の 故郷カンボジアは今



10歳のこのチョムリス君

あの暗黒時代をくぐってきたために、どこの村にも虐殺の絵が飾ってある。(チョムリス君の絵ではないが)

フリーライター 柳原和子

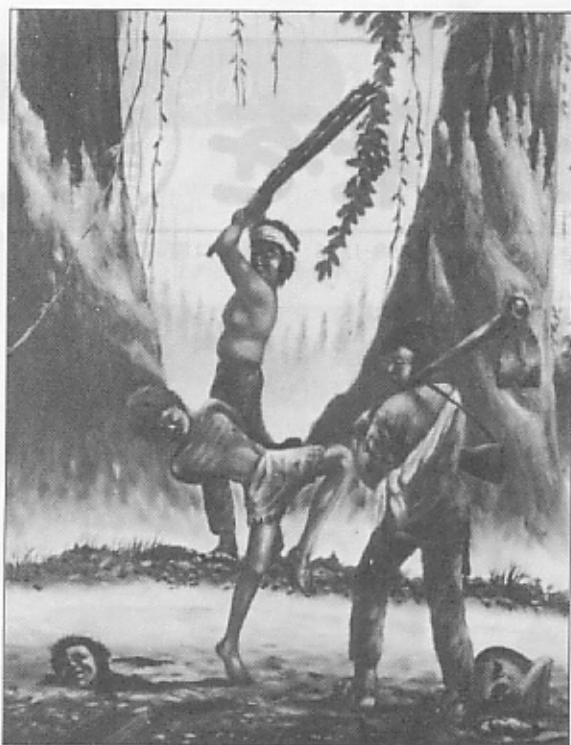
昨年12月、「虚空へ—鎮魂曲カンボジア」という写真展が東京・新宿で開かれました。虐殺の絵を描く少年、チョムリス・ウン君と出会った一人の女性ライターが、84年に、少年の生い立ちをたどってカンボジア国内を歩いたときの記録です。カンボジアは今どうなっているのか、この写真展を開いた柳原さんに報告していただきます。

難民少年チョムリス・ウンと出会ったのは今から6年前の1月、ちょうど「幼い難民を考える会」のいぎりさんが最初にカオイダンや国境を視察して歩いた頃でした。できたばかりで、まだ診療も始めていなかった日本病棟の医師団にお願ひして、世界各国から訪れた個人ボランティアたちと共に、国境のタイ陸軍刑務所の宿舎に寝起きしながら通い、雑

用を手伝った日々。手伝うといっても、何一つ満足にできる技術もない私は、病人に付き添い、ただ所在なく一日を過ごしている痩せた子どもたちの遊び相手をするのが精一杯でした。バンコクで折り紙や画用紙、クレヨン、ボール、地球儀、英語の本などを買って国境の野戦病院に持ちこみ、言葉もわからぬまま身ぶり手ぶりで遊ぶのです。過去5年間ほ

とんど遊びの世界から遠ざかっていた子どもたちは、またたく間に熱中し、夢中になって新しい遊びを教えろとせがみます。女の子には縫い物、男の子にはバレーボールやサッカー。元来が遊び下手な私の種もすぐ尽きてしまいます。

そんな少年少女たちの中の一人に、チョムリス・ウンの弟チョムティ(当時9歳)が混ざっていたのです。チ



チョムリス君は、アメリカに行つてからもずっと暗黒時代の虐殺を描き続け、その絵の数は四十枚近くにもおよんでいる。

2

ヨムディは、微熱と頭痛の発作に苦しむ兄チョムリス（当時14歳）の看護のために病院で寝泊りしていました。

チョムディが私をチョムリスに会わせてくれた日に私はチョムリスの描いた絵を初めて見たのです。棍棒で頭を殴られ、殺されようとしている上半身裸の痩せた男の絵。背景は黄色い夕暮れどきにぬられ、おまけに殺そうとしている兵士の顔は不気味にも笑さえ浮んでいます。私は、私の渡したクレヨンと画用紙がまさかこんな絵になって返ってくるとは思っていませんでした。

絵の背景にあるものを追って

周囲の大人に“この絵は本当のことか？”と問いました。チョムリスは“ぼくは見た”と言うものの信じられなかったからです。誰もが笑つてうなずくだけ。その日以来、毎晩のように描いてくれた絵は合計17枚にもなりました。

一度帰国し、再び少年チョムリス

を国境に訪ねたとき、彼と彼の一家はタイ政府の方針で他のキャンプに移動し、行方知れずになっていたのです。その日から二度、三度と国境を訪ね、彼の姿を探したのですが見つかりません。ようやく国連の調べでアメリカに定住出国したことを知り、彼と再会したのが1983年暮れ、実に4年ぶりのことでした。

その間、チョムリスに会えなくても、彼の絵の背景をもっと詳しく知りたい、とカンボジアのブノンベン外務省宛に2度の入国申請を提出したものの梨のつぶて。テレビ局を通じてようやく許可が下りたのが1984年夏のことでした。チョムリスという一人の少年、1965年アメリカの北爆開始の年に生を受けて、カンボジア現代史を生身に生きてきた彼の生い立ちを彼に代わってとり歩く、それが私の希望でした。

めざましい復興ぶり

ホーチミン経由でブノンベン入りした私は、まず首都の復興ぶりに驚

きました。市場には、新鮮な生鮮食料品が溢れ、街頭の露店商たちにもぎやかに復活し、間のはずの日本製ラジカセや洋酒も山積みされて売られているのです。生鮮食品以外のほとんどは、タイやシンガポールからの密輸入品。国境でタイ兵に追われベトナム軍の検問をすり抜け、首都までたどりついた貴重品の山また山。経済復興、人びとの再生意欲を刺激するには、闇物資にも目をつぶる、というのが実情のようです。人びとの心に、豊かさへの憧れは根強く、タイ国境を通じて、西側の物量による感情の刺激は確実に“自由の国”の幻を追わせていることも事実です。7年目を迎えてなお難民が“自由”を求めて危険な国境の地雷帯を逃れる理由の一端がそこに伺えます。

さて、一步首都を出て国道沿いを走ると、9月は田植えの季節。雨季明けまでに、田植えを終えようと、集団農作業が進められていました。スピーカーから労働歌を流し、即席のバンドの演奏を背景音楽にして、農民たちが苗を植えています。男性



ブンベンには、活気にあふれている。市場にはたくさんの方たちが、野菜、果物、魚、食用にする小鳥などを売っている。寺院では満月のお祝いが行なわれていた。

は田おこしに忙しく、女たち、老人たちが田植え、子どもは牛の世話と、一見すればのどかなアジアの農村風景が続きます。カンボジア東部諸州での復興は目ざましく、地区委員会の誘いで見学したコンボンスプー市の病院では、農作業事故による外傷の患者以外は、妊産婦や赤ん坊だけ。ベトナム人医師の指導のもとに、地域の公衆衛生の実績を図表データで発表してくれるなど、蘇生への意気込みは強いものでした。

もちろん、街や重要な拠点には、ベ

トナム軍の駐留は日常化していますが、村人たちも以前よりはまし、と日々の暮らしに精一杯、というのが本音ではないでしょうか。

空前のベビーブーム

そんな人びとですが、いざ深く話しこんでみると、誰もがあのポル・ポト政権時代とそれに続く戦乱で失なった家族を思い出して涙を流しながら話します。親戚、家族40人を失い、たった一人で現在の夫と強

制結婚させられたという女性など、この国では欠損家庭が普通のことなのです。

孤児院の子どもたちも成長を続けています。今、ブンベンの孤児院では音楽と手芸がブームです。その表情に危惧したような暗さはなく、過去ではなく、未来を見つめはじめた心構えが、ありありと感じられたものです。

子どもといえば、ブンベンには空前のベビーブーム。露地には子どもが湧くように群れ、これだけの人口



噛みたばこで口を真っ赤にしていた女性。



国道沿いの田んぼでは集団の田植えが行なわれていた。



どの村にも子どもがあふれている。(バクタンバン村にて)



地面を掘ると今でも骨が出てくる。(フノンベン郊外チュニック村)

急増を支えるだけの経済復興能力を心配するほどである。

その経済の大半を占めているのが軍事費。タイ国境に隣接するバクタンバン州には、治安を心配してか、たった4時間の滞在しか許されませんでした。かつての第2の都市バクタンバンは、人々が激減、速く散発的に聞こえてくる砲声にも、住民たちは驚く様子もなく、田植えも終わり、庭には春巻きの皮を干したり、漬け物の葉を陽にあてたり、戦場慣れした日常生活を隔間見ることができました。

救いだった人びとのたくましさ

さて、最後に訪れたのがアンコールワット。荒れて、崩壊寸前だと聞いていた噂は、嘘であってくれば

よかったのに、バクテリアの巣になり、仏像の首は皆無、崩れ落ちた石柱が補修の予定もなく、地面に転がっています。

さまざまな大国の思惑の陰で、いったいカンボジアの政治的解決とアンコールワットの崩壊とどちらが先に訪れるのか。文化が政治と軍事的なパワーゲームの圧倒的な力に敗北していく姿を眼のあたりにしたという印象でした。

難民少年チョムリス・ウンも今年には20歳。彼の生れ故郷コンボンブーは廃墟となり跡かたもなくなっていました。全土が骨、骨、骨の墓場となった祖国にあって、それでも人びとが理屈でも政治でもなく、ただ生き延びんとしているたくましさだけが、救いだったように思います。

(チョムリス君は現在、奨学金を受

け、テキサス大学建築学科に通学しています。)

■柳原和子さんのプロフィール

東京女子大学社会学科卒。編集の仕事を経て、フリーライターに。カンボジア難民の問題に取り組んで6年になる。近く『虚空へ——ウン・チョムリスと私』が出版される予定。

インドシナ豆事典①

「インドシナ」

「インドシナ」という言葉は、かつてこの地域を植民地にしていたヨーロッパ人の造語です。ですから現地の人には使わない言葉です。

その由来は、一説にはインド文化と中国文化の影響を受け、その両方の性質を持っているからといわれ、また一説に、インドとシナ(中国)の中間の位置だからともいわれています。

インドシナ半島のことを、タイ語で「黄金の半島」、ベトナム語では「東洋半島」といいます。

インドシナの東半分、ベトナム、ラオス、カンボジアは旧仏領で、インドシナ三国とよばれます。この欄では主にこの三国を扱います。



希望の家レポート



降園風景

毎月、東京の事務局には、現地スタッフから、カオイダンキャンプでの保育の様子を伝えるレポートが届いています。以下は、このレポートから一部抜粋し、要約したものです。

●水浴び用のタオルを作る(85年8月)

毎日の水浴びが水をかけるだけで、子どもが多いと保育者が洗います。子どもが自分で体を洗えるように小さなタオルを作りました。以後保健係の先生を中心に石けん、しらみとりシャンプー、体ふきタオルなどに加え、この小さなタオルがいつも子どもが使えるように用意されました。



●家庭訪問調査の結果がまとまる

(8月)

昨年7月末、希望の家に来ている子どものうち220名の家庭訪問調査を行ないました。

その結果、次のような問題点がわ

かりました。

- 飲料水をわかさない家庭が多い。(燃料のマキが十分でないため)
- 下着をつけていない子どもが多い。
- 服の数もあまり多くない。(上下とも平均2.6枚)
- 子どもはいつもトイレを使っていると答える人が多いが、実態に即していないのではないか。ちなみにどこでやってもかまわないという答えも多かった。

●保育園に保護者を招く(8月)

保健衛生について、親の意識を高めてほしいと思い、まず手はじめに親の足を保育園に向けるため、集まりを持ちました。ゲーム、ダンス、歌などを親たちも楽しめるように企画したつもりでしたが、子どもと保育者がゲームを楽しみ、親はそれを見つめるという、父兄参観日のようなになってしまいました。保健衛生の話は、時間がなくてできませんでした。

この集まりは、今後の催しの反省材料として活用したいものです。

●21区、23区保育園交流会(9月)

キャンプ内にCYRの保育園は2か所あります。保育者の意欲の低下が感じられるため、園を活気づける目的で、2つの園の交流会を持ちました。歌と踊り、人形劇を行ない、保育者、子どもたちが共に楽しく過ごせたようです。保育にも活気が出



てきました。

●障害のある子どもとの交流(9月)

23区保育園の隣りにある、イギリスの民間団体CORがつくっているスペシャルスクールには、小学生以上の障害のある子どもがいます。(現在は、耳に障害がある6名)

以前この学校を見学に行った折、教室の狭さ、外の遊具がないこと、ほかの子どもから隔離された印象などが気になりました。また、希望の家の子どものためにも、多くの子どもと関わったほうがよいというので、交流を持つことを始めました。保育者も彼らへの関心を高め、手話を覚えようとする姿勢も出てきています。

●キャンプならではの遊び(11月)

バナナの葉っぱを野菜に見たてて料理をし、紙で作ったお金で、子どもが買いに行きます。そこへ、保父さんが兵隊になって取り調べに来て、子どもたちは逃げ回るので、これは、キャンプの中のブラックマーケットの様子を遊びにしたもので、生活に密着した遊びが考え出されています。

※ブラック・マーケット

キャンプ内では、物の売買が認められていませんので、表向きは、お金のやりとり、商売はあり得ません。しかし、実際には、タイ軍人に袖の下を渡したり、鉄条網を乗り越えたりしたさまざまな商売人が、やみの市場＝ブラック・マーケットを開いています。お金さえ出せばだいたいのは揃うようです。

開発教育を 勉強中です

大阪府
東大阪市



中野能行

みなさま、お元気ですか。今日は「アジア協会・アジア友の会」という民間団体の勉強会について紹介したいと思います。

この団体は大阪にあり、主としてインドなどアジア地域での井戸掘りに関する資金援助を行なっています。この団体の職員である伊藤さんが中心となり、開発教育をテーマに勉強会を毎週水曜日の夕方に開いております。

ここにおける開発教育の狙いの一つとして、難民・貧困など南北問題について、さまざまな面より学習し、我々が今後どのように改善を行なえるかを考えるという事があります。現在はインドのガヤ地方にて、子供たちに農業学校を開いているイギリスの民間団体が製作した、中学クラス向けの開発教育に関するテキスト

をみんなで学習しています。この勉強会では今後、日本の子供たちに使ってもらえるような教材製作にも取り組んでみたいと考えています。

私はCYRの事務所には少し遠い所に住んでいますし、また難民の方に直接会う機会もないため、この勉

強会に期待を持っています。それは、CYR会員として援助活動も大切ですが、一般の方やこれからの世代に正しくCYRの活動が、このような開発教育などを通じて広報されていくことは重要だと思うからです。このような勉強会に興味をお持ちの方は、私の方に御連絡下さい。

忘れられる インドシナ難民

埼玉県蕨市 三島佳子

朝日新聞でCYRについて知り入会して以来半年余り、新聞記事の切り抜きをしております。その中で感じたことは、こういう問題がすぐニュース性を失って、忘れられてしまうということです。私が切り抜きを始めてからの短い間に、カンボジア問題及び難民問題に関する記事は、現地情勢の平穏化にともなって、どんどん少なくなり、今でははじめの頃の10分の1位になっています。そして、難民キャンプにいる人、村に残っている人、日本やアメリカなどへ移った人等、安定した生活を送れ

ないでいる多数の人の存在が、一般の人から忘れられようとしています。アフリカ、メキシコ、コロンビアなど、他の援助問題についても、報道された当初の反響にくらべて、持続性の面で問題があるようです。又、昨年の暮には飢餓関係の寄付が増えた反面、海外医療協会への寄付がへり、活動を続けるのが難しいというニュースもあり考えさせられました。けれども、とにかく知らせることにより反応があるのですから、できるだけ多くの人に、現状を具体的に知らせ続けることが必要だと思います。

それから、会報について。タイのキャンプでの活動はよくわかりますが、国内の活動の紹介記事もほしいと思います。

アフリカでの食糧危機が報道される前から、「南」の国々で飢饉は起こっていた。しかも、事態は段々とひどくなっている。なぜ、世界の半分は飢え続けているのだろうか。

この本を読むと、人口増加や天候は食糧危機の「口実」でしかないことがわかる。「北」の多国籍企業や、アグリビジネスが「南」に入りこむことで、「南」はますます飢えていく。「北」からの一方的な技術・開発は、「南」をますます貧しくしている。

食糧危機は人災だ、と著者は断言

一冊
私の
photone

後藤今日子



『なぜ世界の半分が 飢えるのか—食糧危機の 構造』

スーザン・ジョージ 著
小南祐一郎・谷口真理子 訳

している。新聞やテレビでは報道されない部分で、「北」の「南」に対する搾取が行なわれているのだ。それを知ろうともしないで、飽食の生活に浸っているなら、私たちもその人災の張本人になってしまう。

まずは、事実を知ること、そして、考え、行動する。私たちに何ができるのか、と考える時、知らなければならぬ事実がたくさん詰まっているこの本は、大いに手助けとなるだろう。

朝日新聞社刊 1300円

(東京都練馬区)

〈ひまわりコーナー〉

去る12月7日、1985年最後の交流会ひまわりを開きました。

ひまわりは昨年誕生したばかりで一年間があったという間に過ぎてしまいました。思の長い活動を目指して、今年も試行錯誤しながら続けていきたいと思います。

ひまわりは、会員やCYRの活動に興味のある人の交流の場として

毎月 第4土曜日
午後 2:00~4:00

に、原則として広尾の事務所で開かれます。

去年は、報告者や講演者のお話を聞くだけで、その後に参加者の意見を交換する機会がありませんでした。そのため、「具体的に何がで

きるか」という所まで話が進まなかった、と反省しています。

今年は、参加者どうしの話し合いを主に、何か作業をしてみようと思っています。企画案としては、

- 定住カンボジア人の方の経歴談を聞き、生活ガイドを作る
- クメール語を教わる
- CYRの仕事のPRする

……などがあります。とにかく、どんな人でも参加できる、わいわい、がやがやした楽しい会にしたいので、皆様の参加をお待ちしています。もちろん、現地ボランティアが帰国した際には、報告会を開きます。

交流会ひまわりの報告や企画は年4回のニュースでもお知らせしますが、興味のある方は事務所にお電話ください。そして何はともあれ、第4土曜日に来てみてください。

4 環境破壊が恐るべきスピードで進んでいる

5 消費文化が洪水のようにおしよせ 文化的危機に直面している

と整理し、それぞれについての解説がありました。

政府の援助が女性のためになっていないか監視する組織がヨーロッパにはあることも紹介され、興味深く聞きました。

開発のあり方が
問われるとき

編集部

昨年の12月18日、アジアの女性たちの会が、10月から毎月行なっている「開発と女性」をテーマにした講座に出席しました。この日の講師は、朝日新聞社の松井やよりさん。テーマは「女の立場で開発を考える」でした。

アジアの輸出加工区での、農村から来た若い女性が、低賃金、単調労働、深夜労働にあまんなければならない現状から、今の開発は、豊かな国のものでしかなく、女性差別の上ののっとり、しかも、それを助長する形になっていることを指摘します。現在の開発の問題点を

- 1 貧富の格差を助長している
- 2 軍事化・独裁化とセットで進められている
- 3 外国依存の開発で、自立した開発ができなくなっている

原稿大募集!!

会員登場に原稿をお寄せください。すすめたい本、現在やっていること、仲間の募集、勉強していること、疑問に思っていること、会への希望その他何でも。

横書き、16字詰で書いていただくと助かります。字数は600字程度。お待ちしております!!

自分の目で
見てみたい!

兵庫県
明石市



原 千穂

私は、短大卒業後、公立幼稚園に3年間勤務致しました。教師生活2年目くらいから犬養道子さんの著書を読むようになり、大変な共感を覚えました。初めは、「スプーン一杯」への参加だけさせて頂いていたのですが、「今の時代」を、わずかずながらも、より認識するにつけ、この私だからできることを——教育分野の勉強、保育経験、細々と学生時代から続いていた英語の勉強、それに、事実の断片を知ってしまったということ等々をもっと生かす方法を——探さなくては、と思っていました。

そして昨年、現地スタッフ募集の記事を拝見しました。今までは「帰ってきた時の生活方向がもっと定まってから」と二の足をふんでいましたが、今の私にいちばん必要なのは、もはや本でなく、諸会のニュースレターでなく、自分の目で見てくることだとつくづく思いました。

今私は、夜、英語の専門学校に通いながら昼間は会社勤めをしています。日増しに平気になるミスタイプ後の紙の無駄、社用で使う車のガソリン、だんだん増えていく食事代。自己反省を口にし、いまだ解決途しの難民問題の記事を目にするそばから、実生活では、欲が欲を呼ぶ一方です。純粋に、「できることだけでも」と行動を起こし始めたときの自分に帰れるようにと願いつつ、決心をかためています。

催しもの

1985年

9月28日

第14回交流会ひまわり—高島・横井帰国報告会



10月13日

第12回幼い難民のためのバザー。作家の大養道子さんのサイン会も会場で開催、用意した『人間の大地』は完売でした。秋の長雨の合間をぬったお天気で1,529,365円の収益がありました。



10月26日

第15回交流会ひまわり—現地スタッフ小倉雪枝帰国報告会

11月16日

第16回交流会ひまわり—訪問ボランティアを囲んで。

11月22日

新宿区公開講座にてCYRの活動を紹介。

12月7日

第17回交流会ひまわり—1年間のまとめと反省、'86年の計画。

1986年

1月25日

第18回交流会ひまわり—ISSの理事であり、難民定住相談員の伊東よねさんからカウンセリングと里親の話聞く。

去る1月9日、いいぎり代表を囲んでの話し合いが持たれました。その中で代表は「今年は会も6年目。もう勉強をする時期は終わった。失敗を恐れず、何かを始める時期にきている。個人でやっていること、

いいぎり代表より“檄”

体験を個人にとどめないで、もっと組織であることを生かすようにするため、コミュニケーションの輪をもっと広げる努力を。そのためには、まずアクションを！ だれかに決めてもらって“手伝う、”という意識ではなく、一人一人が、自分でやるという意識を！と檄を飛ばしました。会員の方々の発憤を期待します。

8

CYRメモ

- 9・1 第21回理事会
- 9・8 カオイダンの「希望の家」が日本テレビ系「知られざる世界」で紹介される。
- 9・29 山崎尚枝、1年1か月の任期を終え、帰国。
- 9・30 毎日社会福祉顕彰「国際青年年賞」授賞式。毎日新聞社にて。
- 10・23 小倉雪枝、1年2か月の任期を終え、帰国。
- 10・23 第22回理事会
- 10・26 関口久子、峯村里香渡タイ。
- 10・28 河村好美一時帰国。
- 11・2 渡タイ。

1986年

- 1・9 峯村里香渡タイより帰国。
- 1・9 関口晴美一時帰国。
- 1・14 渡タイ。
- 1・10 第23回理事会。

事務局から

- 12月から1月にかけて、みなさまより多大なご寄付・ご支援をいただき、ありがとうございます。12月6日には、横浜・美しヶ丘こどもの家（幼稚園）の子どもたち34人がクリスマスバザーの収益などを持って事務所にみえました。キャンプのビデオを見て、電気も水道もないという環境のちがいに子どもたちは驚いていました。



- 下記の団体より活動資金の援助をいただきました。
全国老人クラブ連合会 5,000,000円
ジャパン・タイムズ 1,000,000円

- R・I・ジャパン 1,940,000円
- CYRには貸し出し用の、カオイダンキャンプの子どもの様子をとらえたパネル、「希望の家」の保育を紹介したスライド、ビデオがあります。どうぞご利用ください。詳しくは事務局へ。（無料）
- 次回のバザーは4月20日（日）。バザー用品をお寄せください。（事務局が狭いので、品物は3月半ば以降にお願いします）
- 現地スタッフ募集中です。キャンプの保育施設でカンボジア保母さん達の指導やお手伝いにあたります。資格は問いません。条件としては、健康なこと、日常会話程度の英会話ができること、1年以上滞在できることの3点です。渡航費、滞在費など会の負担です。
- 新しい年度を迎えます。会費がまだの方、お納めいただきますようお願いいたします。